

松葉城址

- (主) 焼津森線地方特定道路改築工事に伴う確認調査 -

1998

掛川市教育委員会

松葉城址

—（主）焼津森線地方特定道路改築工事に伴う確認調査 —

例　　言

1. 本書は、平成10年2月10日から3月4日まで現地調査を実施した静岡県掛川市倉真字松葉8632-2に所在する松葉城の確認調査報告書である。
2. 調査は、(主)焼津森線地方特定道路改築工事に伴う緊急発掘調査で、静岡県袋井土木事務所を委託者とし、掛川市を受託者とし、掛川市教育委員会が実施した。
　調査費用は、静岡県袋井土木事務所が負担した。
3. 確認調査に際しては、土地所有者の佐藤亘亮氏をはじめ周辺土地所有者の方々には、埋蔵文化財に對し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 確認調査は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。
5. 発掘作業には、次の方々の参加を得た。
　向川隆・大庭虎雄・山本みち・堀井ヤス子・博松房子・井野鈴江・松井しか・鈴木静江・弓削きよ
6. 本書の執筆・編集は前田庄一が行ったが、第5図の松葉城縄張図は掛川市教育委員会の戸塚和美・井村広巳の踏査をもとに戸塚和美が作成した。
7. 調査の記録は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掲図における方位は、磁北を示す。(1998年3月現在)
2. 第5図で使用した呼称と、図版の呼称は同一である。

目　　次

I	発掘調査と遺跡の概要	2
1.	調査にいたる経過と調査の目的	2
2.	調査の方法と経過	2
3.	松葉城をめぐる環境	3
II	調査の内容	5
1.	調査地の土層	5
2.	遺構	5
III	まとめにかえて	9

挿 図 目 次

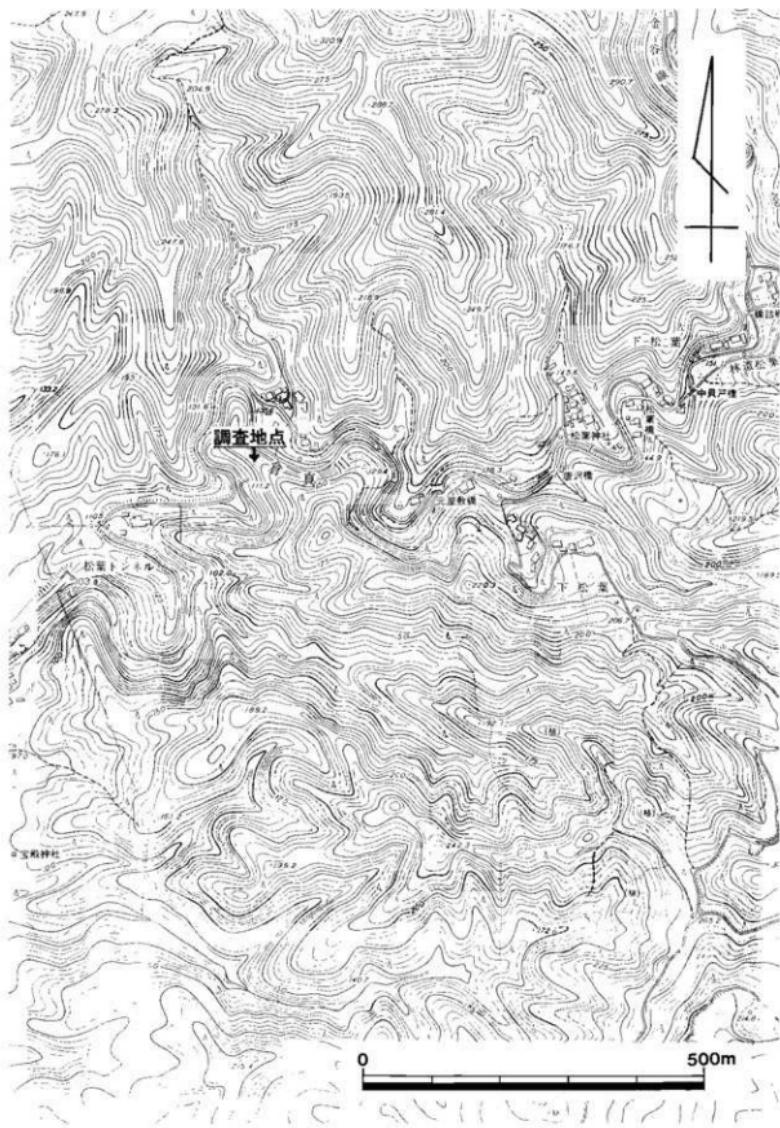
第1図	松葉城周辺地形図	1
第2図	周辺中世城址位置図	4
第3図	調査区全体図	6
第4図	礎石実測図	7
第5図	松葉城縄張図	8

挿 表 目 次

第1表	松葉城関係年表	4
-----	---------	---

図 版 目 次

図版I	上	松葉城遠景
	下	調査地全景
図版II	上	礎石1
	中	礎石2
	下	礎石3
図版III	上	曲輪状平坦面1
	中	曲輪状平坦面2
	下	曲輪状平坦面3
図版IV	上	堀切1
	中	堀切2
	下	堀切3



第1図 松葉城周辺地形図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査にいたる経過と調査の目的

松葉城は、市内倉真字松葉に所在する山城である。この山城について、江戸時代後期の掛川藩領内の地誌を記した『掛川誌稿』に記載がある。『掛川誌稿』では松葉城について、「河合氏古城 松葉村ノ山ニアリ、河合藏人成信カ城跡ナリ、河合氏ハ今川家ノ時ノ人ニシテ明応5年9月10日駿死セシト(以下略)」と記載する。

この松葉城の先端部分を主要地方道焼津森線が横切る計画が、平成9年5月21日に静岡県袋井土木事務所掛川支所から掛川市教育委員会に示された。

そして、平成9年5月30日付で静岡県袋井土木事務所から「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱い」について掛川市教育委員会に照会があった。これに対し、同年6月27日に掛川市教育委員会から袋井土木事務所に「遺跡地内であることから発掘調査が必要である。」との回答を送付した。協議の結果、遺構の有無を確認するための調査を実施することとなり、7月10日に本線部分の確認調査を実施した。この確認調査において遺構・遺物は確認されなかった。その後、本線だけでなく工事用道路も松葉城の中を通ることが確実となったため、工事用道路部分についても平成9年度中に確認調査を実施することとなり、平成9年12月4日付で、静岡県袋井土木事務所と掛川市教育委員会において「松葉城埋蔵文化財確認調査委託契約書」を締結し、工事用道路の確認調査を実施することとなった。

2. 調査の方法と経過

平成9年7月に実施した本線部分の確認調査は、幅1mのトレンチにより埋蔵文化財の有無を確認した。この時の調査地点は丘陵の斜面であり、遺構・遺物は全く確認されなかった。

今回の確認調査地点は本線部分の北側の平坦面であり、遺構や遺物の存在が予想されるため、工事用道路部分約110m²全面を剥ぎ埋蔵文化財の有無を確認することとした。

現地調査においては、工事用測量杭R NO 4 +1.0と工事用測量杭113を結んだ直線上、113からRN O 4 +1.0方向へ水平距離5.269mの地点に杭を打ち、この杭から90度南に振ったラインを基準ラインとした。杭から水平距離で3mの地点に1A杭、1A杭から南に5m離れた地点に2A杭を設置して、測量することとした。この基準ラインは、磁北から34度20分西に振れている。1A杭から北西部分を1A区、北東部分を1B区と呼称することとした。図面は、20分の1と10分の1の縮尺で作成した。写真による記録は、プロニーサイズ白黒フィルム、35mmサイズカラーフィルムとリバーサルフィルムによった。

以下、作業の経過を記述する。

- 2月10日～13日 2B区掘削、礎石を検出したため、北に拡張し1B区とする
- 2月16日～19日 1A区、2A区掘削、礎石を検出
- 2月23日～27日 3A区、3B区掘削
- 3月2日～4日 3B区掘削、平面実測、写真撮影

3. 松葉城をめぐる環境

松葉城は掛川市の北東部に位置し、市街地からの直線距離は約8kmを測り、市の中心部を北から南に貫流する2級河川倉真川の源流近くに位置する。松葉城の東約1.5kmには海拔527mの栗ヶ岳があり、この栗ヶ岳を越えれば榛原郡金谷町、そして大井川を越えれば駿河国である。

松葉城は、今から約500年前の室町時代に川井氏の居城であった。この川井氏について多くは伝わらないが、『掛川誌稿』では「川合宗忠ハ、当時今川家ノ幕下ニシテ、倉真村松葉ノ城主タリ、其頃勝間田播磨守、鶴見因幡守ト云者アリ、故アリテ相與ニ謀リテ松葉ノ城ヲ襲フ、時ニ川合氏ノ家臣落合九郎左衛門久吉ナル者内ニ恨ムル事アリテ、ウラキリヲナセシカハ、宗忠忽利ヲ失ヒテ、竟ニ戦死スルニ至ル、其妻女モ亦深淵ニ溺死ス（以下略）」とあり、今川家の家臣としている。

これに対し、小和田哲男氏は『掛川市史 上巻』のなかで次のように考察されている。

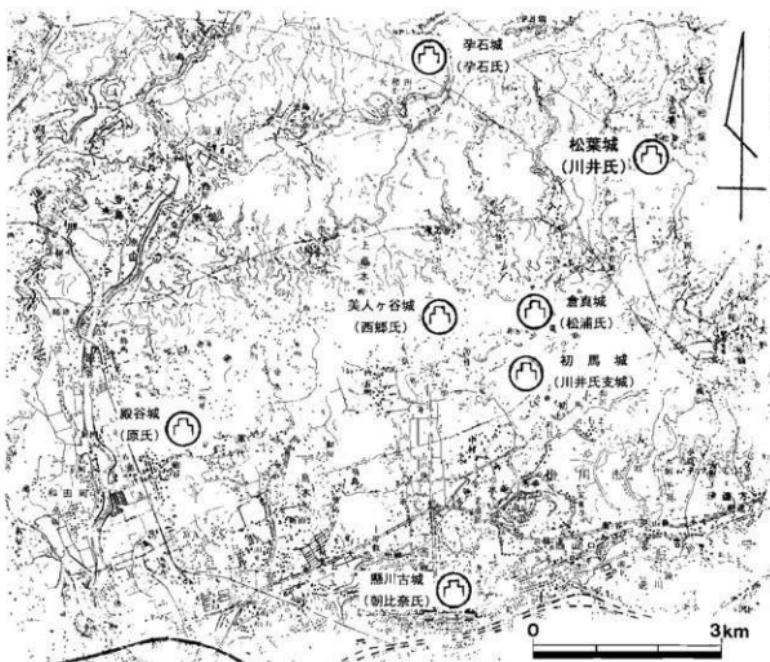
「現在の掛川市域において最大の力を持っていた国人領主は、原氏であった。原氏は、東遠の横地氏や勝間田氏と並び、北遠の天野氏、西遠の井伊氏などと肩を並べる遠江を代表する国人領主であった。そして、ランクとしては国人領主であるが、規模の点でかなり劣るものに、川井氏・松浦氏・鶴見氏らがいた。（中略）室町時代末には、川井氏は松葉城を本城とし、初馬城を支城とし、国人領主制を展開していたが、明応5年（1496）9月、今川氏親・北条早雲によって攻められ没落した。（中略）戦いが近づくと、戦場となることが予想される地域の郷村とか寺社に禁制が出されることがある。このときの松葉城攻めにはそれがあるのである。松葉城近くの長松院（掛川市大野）に、明応5年7月18日付で、つぎのような今川氏親の禁制が出されている。（中略）こうした禁制が出されることは、「そのあたりが近いうちに戦場になるぞ」という予告でもあった。つまり、その年の7月18日から、そう日がたたないころから松葉城攻めがはじまると思われる。川井成信の末裔と称する家に伝わる何種類かの「河合氏系譜」をみると、川井成信の戦死の日を明応5年9月10日としている。何によってその月日が記されたのかはわからないが、落城の日を9月10日とする所伝があったものであろう。落城の日が9月10日だったかどうかはわからないものの、9月中旬に決着がついたであろうことは、つぎの今川氏親判物からうかがうことができる。（以下略）」

松葉城落城前後の掛川周辺の動きを、やはり『掛川市史 上巻』の小和田哲男氏の記述をもとに記すと以下のようになる。

文明5年（1473）、將軍足利義政から駿河守護職今川義忠が懸草莊の代官職に補任されて以降、遠江守護斯波氏と遠江侵攻を窺う今川氏との間で抗争が生まれる。翌文明6年（1474）には、今川義忠は遠江への侵攻を開始し、見付城を攻め落城させる。文明8年（1476）には国人領主で斯波氏の被官であった横地氏と勝間田氏を攻め滅ぼす。ところが、義忠は駿河に凱旋する途中の塩買坂で横地・勝間田氏の残党により討たれてしまう。

義忠の嫡子氏親の後見人である北条早雲は、明応3年（1494）に、佐野郡を代表する国人領主である原氏を滅ぼすために遠江に侵入した。そして明応5年（1496）に、原氏と共同歩調をとる川井氏が攻められたのである。翌明応6年（1497）には、倉真城主の松浦兵庫助、そして原氏が討たれた。原氏討伐から11年後の永正5年（1508）、氏親は遠江守護職に補任された。今川氏の重臣朝比奈氏により、原氏討伐の明応6年から文亀元年（1501）までの間に懸川古城が築かれたと推測することができる。

現在その場所は定かではないが、『掛川誌稿』には河合宗忠戦死の日に妻妾が投身した淵という「御台淵」「姫淵」等があると記載されている。



第2図 周辺中世城址位置図

西暦	年号	と
1473	文 明 5	駿河守護職今川義忠、将军足利義政から懸革在の代官職に捕任される
74	6	今川義忠遠江へ侵攻し、見付城を攻め落とす
76	8	今川義忠、横地氏と勝間田氏を攻め滅ぼすが、凱旋の途中で討たれる
94	明応 3	義忠の嫡子氏親の後見人である北条早雲、遠江に侵入
96	5	川井成信、今川氏親・北条早雲に攻められ討死
97	6	倉真城主松浦兵庫助、原氏、今川勢に攻められ討たれる
1508	永 正 5	今川氏親、遠江守護職に捕任
1497 ~ 1501	明応6~文亀元	今川の重臣朝比奈氏により懸川古城築城

第1表 松葉城関係年表

II 調査の内容

1. 調査地の土層

松葉城は、海拔527mの栗ヶ岳から連なる山稜に位置し、最高所の海拔約220mを測る。城跡には現在、曲輪状の平坦な場所と堀切が見られるが、これらの曲輪状の平坦面や堀切が室町時代当時の城の遺構なのかは調査がなされていないため判然としない。

山稜の間には深く急峻な谷があり込み、北側から西側には倉真川が流れ、天然の要害となっている。

今回の調査地点は、幅20mから30mの倉真川が東側から北側、そして西側にまわり込むように流れる半島状に突き出た場所である。調査地点の海拔は約135mであり、最高所からは85mほど低くなつた場所で、12m×15mほどの平坦面となつている場所である。

調査前は茶畠になつていたため、土層はまず厚さ約25cmの茶畠の耕作土がある。茶畠以前には炭焼き窯があつたということで、耕作土中には多量の炭と赤く焼けた岩が混じつていていた。耕作土下には、厚さ5cmから10cmの暗黄褐色土が存在し、この土にも炭と赤く焼けた岩が混入する。調査当初は、茶畠の深耕により炭焼き窯の炭・岩がこの暗黄褐色土にも混入したものと考えたが、土が固くしまつていてことと、混入する炭・焼けた岩の量がごく微量であることから、混入ではないと判断した。この暗黄褐色土を取り除いたところ人為的に置かれた礎が現れ、礎石と判断した。

2. 遺構

調査地の北半から検出された礎3点を礎石と判断した。検出した当初は、この礎は地山に含まれる礎ではないかと考えたが、地山の礎は斜めに傾いた状態で検出されるが、3点の礎は上面がほぼ水平な状態で検出され、同じくらいの高さから検出され、人為的に置かれた礎であることが明白であり、用途としては礎石の可能性が最も高いと判断した。

礎石1は、一辺約20cmのほぼ正方形の自然礎で、厚さ4cmから6cmを測る。礎の上面は水平になっている。礎に重量がかかったかのように中央部で2つに割れている。

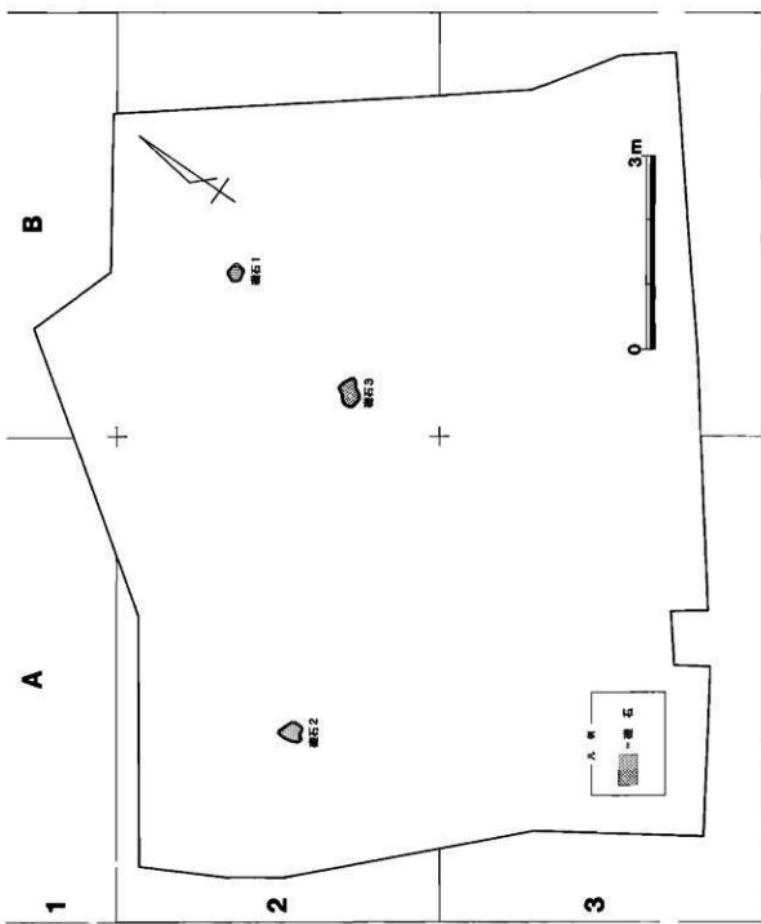
礎石2は、30cm×30cm程度の大きさの三角形状をした扁平な自然礎で、厚さは3cmから5cmを測る。礎の上面は、西から東に2cm傾いている。この礎も、ほぼ中央部で2つに割れている。

礎石3は、30cm×40cmの五角形状を呈する扁平な自然礎で、厚さ4cmから7cmを測る。礎の上面は、西端から中央までは水平であるが、東端は中央部より6cmほどさがっている。

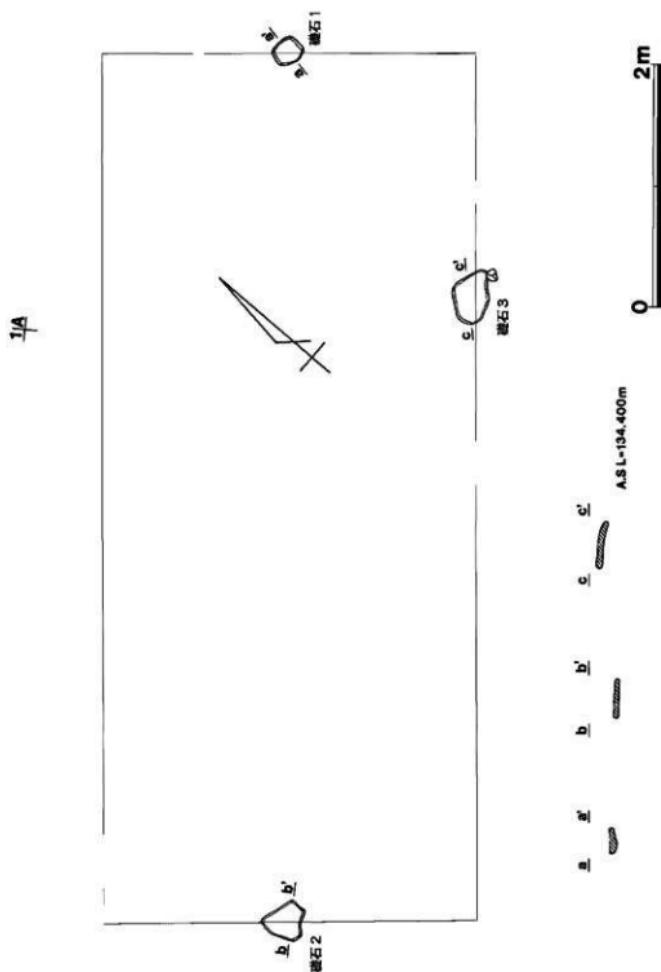
この3点の礎を礎石と考えた場合の建物は、南北棟の側柱建物と東西棟の側柱建物の2種類が想定できる。建物を方位に合わせて建てたと考えると南北棟の建物を復元でき、礎石1が北東隅の柱位置、礎石2が南西隅の柱位置になる。これに対し、地形に合わせて建物を建てたと考えると、東西棟の建物を復元でき、礎石1が東側の妻側中央の側柱、礎石2が西側の妻側中央の側柱の位置になる。

南北棟の側柱建物を考えた場合、2間×2間の建物となり、柱間は2.1mから2.5mとなる。そこで、地形に合わせて東西棟の建物を推定した。礎石1と礎石2の間の距離が芯々で7.1mであり、1間を1.8mとすると約4間、梁間は礎石1と礎石3の関係から1.5mと考えた。調査区の東端、西端が丘陵の縁であるから、礎石1から丘陵の縁まで2.5m、礎石2から丘陵縁まで2.2mとなる。

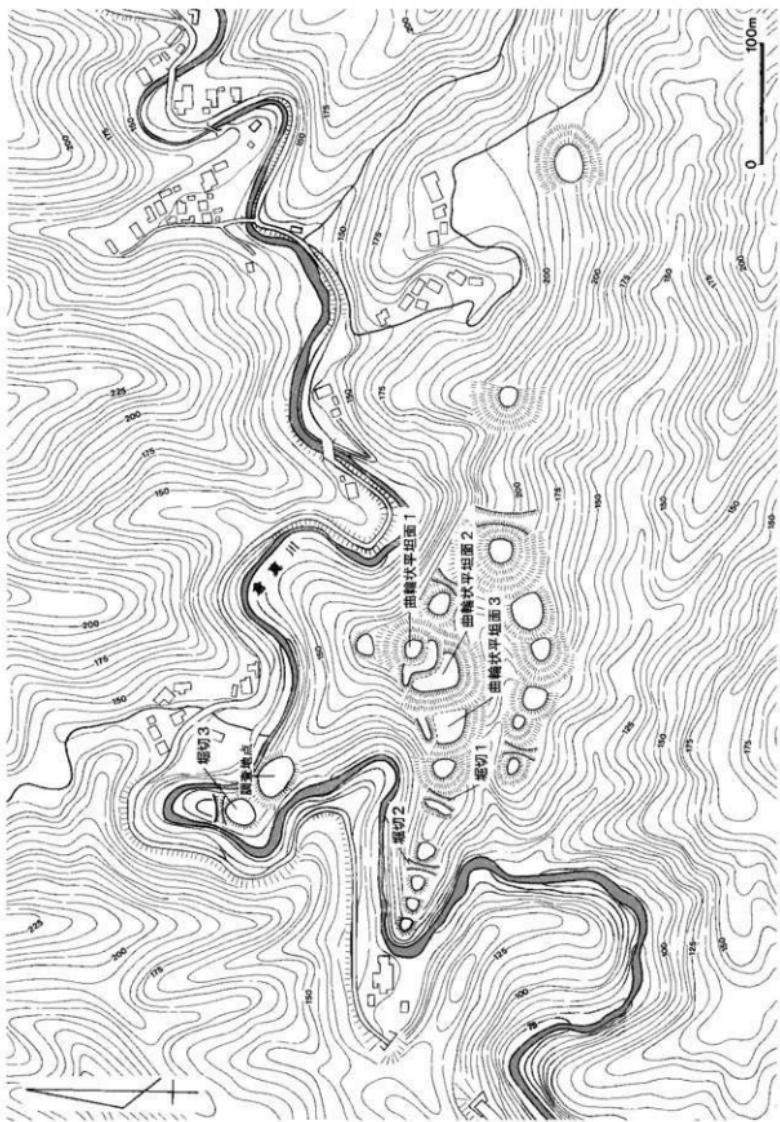
建物の方位は、N-49°-Eと考えられる。



第3図 調査区全体図



第4図 碓石実測図



第5図 松葉城縄張図

III まとめにかえて

今回検出された3個の礫は、側柱建物の礎石と考えることができる。しかし、残念ながら出土遺物が全くないため、建物の時期の特定はできず、茶窯や炭焼き窯よりは古いということしかわからない。

今から約500年前に、ここ松葉城であった戦の痕跡も発見できなかった。

調査中に地主の方にうかがったところ、松葉周辺では炭焼きが生計の主な手段であって、米作はほとんど行われなかつたとのことであった。現在も松葉周辺では炭焼きが行われているが、松葉城内と考えられる場所でも、かつての炭焼き窯のあとを何ヶ所か見ることができる。このような炭焼きに生計を頼る生活は、おそらく500年前も変わらなかつたのではないか。

平坦な土地が少なく、米作をほとんど行えないというような場所を本拠とする川井氏は、いったいどれほどの勢力を有し、戦の時にどれくらいの人数がこの松葉の城に籠もつたのか。

今後、文献にはほとんど出てこないこのような中世の人々の生活などが少しでも明らかになればと考える。

引用文献

- (1) 中村 育男 『掛川誌稿 全翻刻』 静岡新聞社 1997
- (2) 掛川市史編纂委員会 『掛川市史 上巻』 掛川市 1997

図 版

図版 I



松葉城遠景



調査地全景

図版
II



礎石 1



礎石 2



礎石 3

図版
III



曲輪状平坦面 1



曲輪状平坦面 2



曲輪状平坦面 3

図版
IV



堀切 1



堀切 2



堀切 3

報告書抄録

ふりがな	まつばじょうし							
書名	松葉城址							
副書名	(主)焼津森線地方特定道路改築工事に伴う確認調査							
編集者名	前田庄一							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537) 21-1158							
発行年月日	西暦1998年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
まつばじょう 松葉城	静岡県掛川市 倉真 8632-2	22213	426	34度 46分 29秒	135度 58分 08秒	19980210 ↓ 19980304	110m ²	道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松葉城	城館	不明	礎石建物	なし				

松葉城址

確認調査報告書

平成10年3月25日

掛川市教育委員会
編集発行 掛川市長谷701番地の1
TEL (0537) 21-1158

龍幸栄印刷
印 刷 掛川市弥生町35
TEL (0537) 24-4341